薬研藤四郎がモブにヤられる本

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の購入・閲覧禁止

京都攻略のため
レベリング中だった
短刀部隊――
しかし不運な事に
審神者の手癖で
厚樫山に放り
込まれてしまった！
いつものクセで…
さ
じじい難民
必ず援軍連れて
戻るから！
待ってろよ！
おう
頼んだぜ
Lv80
中傷
中傷
v13
Lv8
ごめんなさい
薬研兄さま
僕らの力が
及ばない
ばかりに…
なに
気にすんなよ

心配しなくても
すぐ迎えが来るさ
何かいる……
敵？
いや
獣か？
俺一人で
やるしかねぇが
……
今は短刀に
有利な夜
殺せる

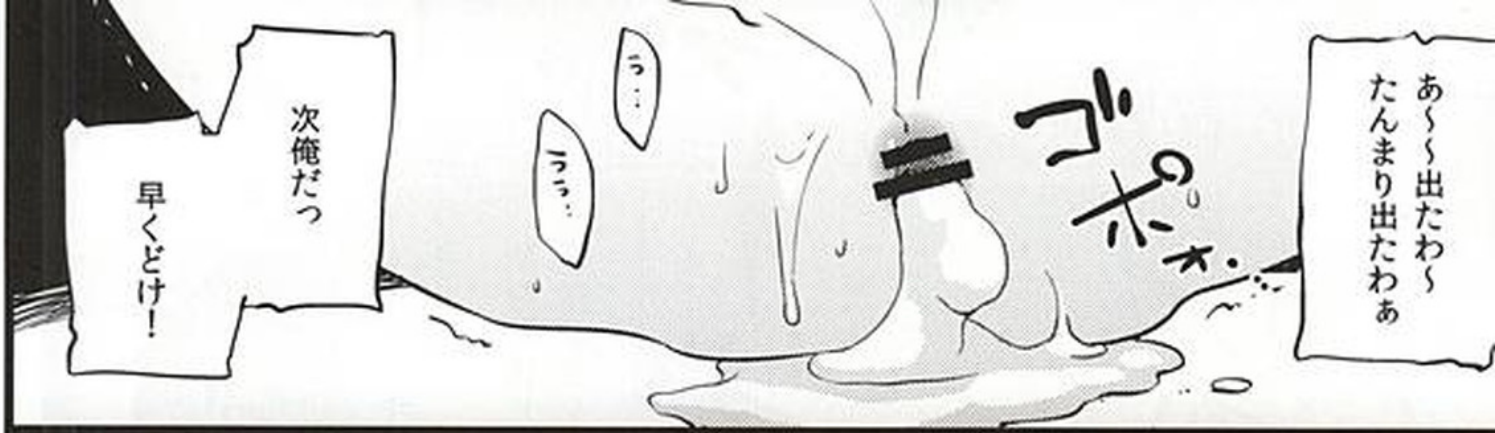
パチ
パチ
こんな山奥に
こんな上等な
ガキが落ちてる
とはツイてるぜ
くっ
どこから逃げてきた
稚児だ？
へへ
変な着物
着てやがるな
くそっ
本気になりゃ
こんな奴ら
すぐ勝てるのに…
時を遡った先では
人間との接触は
最低限に
何があっても
傷付ける事は
御法度だよ

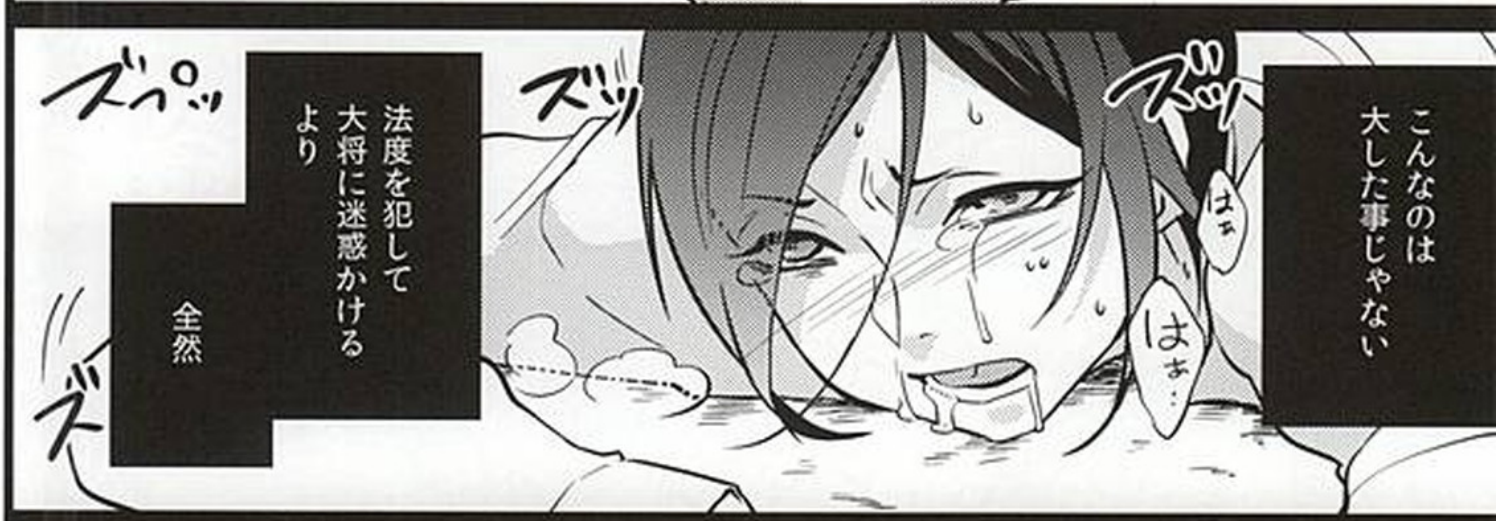
へへっ
どうしたア
最初の威勢は？
弟のために
一人で頑張るん
だろアニキ！
ニヤ…
ぎゃ。
…ああ
あんな小便臭い
ガキ共目じゃない
ぐらい
あんたら全員
金玉の中
空っけつにして
やるからよ
よォし
よく言った
ニタ…
なら山ン中で
溜まりに溜まったモンを
ボロン
全部吸い出して
もらおうか

ズッ
ズッ
ぐちゃっ
ジュッ
ちゅるっ
ガハハハ
すぐ喉突いちまう
なこりゃ
ぢゅぽっ
ぢゅぽっ
うおヤベェ
色白モチモチ肌
ぢゅぽっ
尻穴小っせぇ
デカイ口叩いといて
処女かアニキ
あ～～締まる
喉締まるわァ～
ちゅぐ
ちゅぐ
出すぞ
飲めオラぁ…
ビッ

ボチッ
吐いてら
ガバッ
ゲボッ
ボタタッ
まだガキには早い
大人の味だったか？
よォしこっちも
そろそろいい
塩梅だわ
ビクッ
ぐぽぁ
ホレ
よおく見とけよ
アニキ
ラッ…やめ…
アーッ
自分がオンナに
される所を
なッ！
ぴと
あっ
あッ
ガクッ
ガク
ゴンッ
ブチ
ブチッ

フン！
フンヌ！
ズプッ
ズッ
ズッ
あーーーキッツキツに
絡みつきよる
初心な顔して
淫売がぁ～～～～
ぐぽっ
ぼちゃ
フンナァ！
女日照りの魔羅に
しみるわぁ～
あ～でるでる
ドスッ
ドスッ
ビュルル～
ビクッ
ビュッ
ビュッ
ビュ


あ～～出たわ～
たんまり出たわぁ
ゴポォ
う…
うぅ…
次俺だっ
早くどけ！


こんなのは
大した事じゃない
ズッ
はぁ
はぁ…
ズッ
ズっポッ
法度を犯して
大将に迷惑かける
より
全然
ズ

おお
これは懐かしい
顔がいるな

道に迷ったので
一晩宿を借り
ようかと思ったん
だが
まさかこんな所で
お主に再会
するとはな
あ…
はっ
七百年程ぶりに
なるか
して薬研よ
助太刀が
必要か？
あい
わかった
はっ
ゼッ
ハー
たすけ…
て

それに

塵芥（ニングン）が一掴み程
消えたところで
歴史はかわらんさ

名も無き刀の、

じょあ子

ぱちり、と音を立てて松明の炎が爆ぜる。

石壁に伝う地下水だか雨水だかがぬめぬめと松明の光が反射して、じっとりと湿った空間を作り出していた。

ここは時間を逆行する連中を取り締まる『検非違使』の集う本丸の地下。先が闇に飲まれてしまうほど長い地下道の両脇には木格子の牢が並んでおり、牢の扉にはそれぞれ呪符が貼られている。どういう仕組みかはよくわからないが、牢の中に閉じ込めてある付喪神を縛るためのものらしかった。

牢に捕らえられた付喪神の使い道は様々だ。検非違使の連結強化に使われる者もいれば、刀剣男士を相手取る際人質のように使われる者もいた。刀剣男士は存在同士が引き合うとも言われており、山狩りの犬のように使われていた者もいる。捕らえられている刀種は御しやすいと言われる短刀が多く、私の目の前にある牢に張られた呪符に書かれた名も粟田口の短刀『薬研藤四郎』のものだった。

そして、自分は検非違使陣営に属する号も銘も持たぬただの打刀であり、この地下牢の見張り役である。

見張り、と言っても捕らえられた者が逃げ出す事は殆ど無かったし、どちらかといえば今目の前で行われている行為の見逃し役と言った方が適切かもしれない。

「……、――ぐ、あぁっ……！」

湿った空間に、さらに湿度を足すような湿った声と音が響いた。獣のような息づかいと、耳障りな呻きが先ほどからずっと続いている。牢の中で、それこそ獣のように這いつくばった槍の巨大な体躯の両脇からは白い棒のような足が突き出してゆらゆらと揺れていた。

言葉も持たず、ただ命じられるまま戦いに臨む我らに娯楽は少ない。ゆえに、思いつきで始まった人間の真似事――交尾の悦楽に夢中になる者は多かった。上の連中も、折る事さえしなければ大抵の事には目を瞑るつもりらしく、咎められた事もない。

「はっ、あ……ッ、う、ぐ」

巨体に組み敷かれた薬研藤四郎は、細く頼りない身体を異形の魔羅に深々と貫かれながら、それでも無様な悲鳴を上げまいと必死に手袋に包まれた自らの親指の付け根を噛みしめている。身体に見合った小さく慎ましやかな菊座は無惨に蹂躙され、魔羅を抜き差しされるたびに泡立つ精液と血が混じったものを垂れ流していた。

上等な誂えの戦装束はすっかり剥かれ、露わになった肌は暗闇にあって尚輝くように白い。穿たれるたびに反らされる胸には薄い桃色をした突起が見える。槍が鋭い爪でそこに触れれば、柔らかな肌に紅い筋が走った。

「ふぐっ…、うぅ！」

槍が獣のように勢いよく腰を振るたび、薄い腹の肉がぼこりと歪に盛り上がる。童の身体には過ぎた凶器だろう事は想像に難くない。限界が近いのか、無骨な異形の手が細い腰を鷲掴み、律動が一際早くなった。

全身をこれでもかと突き上げられ、嗚咽とも悲鳴とも付かない苦悶の声を上げながら薬研藤四郎は細い足で藻掻くように空を蹴る。乱杭歯の奥から槍が一際大きな唸りを上げると、薬研藤四郎は「ひっ」と引き攣れたような声を上げて身体を強ばらせた。

ぶるぶると槍の身体が震える。絶頂を迎えたのであろう。薬研藤四郎の身体に深くのし掛かって精を注ぎ込む姿は、まさに動物の種付けのようだった。

「あ、や……ッ、あぁ……」

巨躯に押しつぶされ、牢の外にいる私からはすっかりとその姿が見えなくなった薬研藤四郎の押し殺したか細い声が聞こえる。槍の脇から突き出した細い足だけが、引きつけを起こしたかのように断続的に震えていた。全てを出し切った槍が深く差し込んでいた長大なものを

抜き出せば、ぽっかりと口を開けてしまった菊座からどろどろと白濁が糸を引いて溢れ出す。

ごひゅう、と一つ満足げな息をつくと、槍はようやく薬研藤四郎を手放し、どすどすと足音をたてながら牢から出てきた。

槍は、この本丸では上位の存在だ。下っ端の打刀である私は目を合わせないように少し俯き、槍が目の前を過ぎるのを待った。

ちらりと牢の中に目をやれば、薬研藤四郎はぐったりと地面に身を横たえたままピクリとも動かない。

生白い身体には血が滲むひっかき傷。強く掴まれた腰にも手形が痣のように残ってしまっていた。散々蹂躙された後孔はふっくらと腫れ、紅く粘膜がのぞいている。これは手入れが必要だな、と私は嘆息した。いざ本来の目的で使う時が来た際に、これでは使い物になるまい。

私は呪符の張ってある扉を開け、中へ足を踏み入れる。

力なく石造りの冷たい床に投げ出されていた腕を掴んだ瞬間、ばしりと音がして腕を振り払われた。見れば、気を失っているとばかり思っていた薬研藤四郎が眉間に皺を刻んだ険しい表情でこちらをきつく睨み付けている。

「情けをかけるつもりかよ……」

目元には色濃く疲労と苦痛を滲ませているが、澄んだ藤色の瞳は燃えるような憎悪と強い光を宿していた。

私の腕をはねつけ、自力で立ちあがろうと床に両腕を突っ張る。けれど、身体が言う事をきかないのだろう。棒のように細い両腕は、ぶるぶると震えて起き上がる事すらままならない。力を込めたせいかまた後孔からはとろりと白濁が溢れて白い内腿を伝った。

「くっ……」

悔しげに薄い唇が噛みしめられて、苦悶の声が漏れる。

結局一人ではどうすることも出来ないだろうと判断した私は、薬研藤四郎の身体を強引に抱え上げ、我が本丸の手入れ部屋へと連行することにした。

「離せ、くそっ……！」

手負いの獣のように暴れ、私の腕から逃げだそうと藻掻く薬研藤四郎の身体は予想よりずっと小さく、軽い。との短刀にも言える事だが、本当にこれで刀が振るえるのだろうかと疑わしい程に繊弱だった。

今日も今日とて牢の見張りを命ぜられた私が地下牢へ降りていくと、すでに地下牢には先客がいた。

子孫を残す本能があるでもないのにお盛んなことだ、と思って牢を覗いた瞬間、予想外に至近距離にあった藤紫の瞳と目があってないはずの心臓がどきりとした。

呪符が貼り付けてある木格子の檻に縋り付くように膝立ちになった薬研藤四郎は後ろから囲い込むように覆い被さった太刀に穿たれている。強引に剝ぎ取られたのか上着も白い肌着もびりびりに破かれていて、暗色の短い袴は膝まで引き下ろされた状態で床にわだかまっていた。

「ん、あ、あ……ッ！」

太刀が薬研藤四郎を穿つたび、しがみついた木格子がぎしぎしと軋む音を立てる。通路に現れた私を見て薬研藤四郎は一瞬驚いた顔をしたが、間髪入れずに体内を抉られて、すぐに衝動に耐えるようにきつく目を閉じた。

槍よりも人間に近い姿を持つ太刀の薄汚れた指が、肋の浮いた真っ白な腹の上を這う。女のように膨らんでもいない平らな胸を揉まれて、薬研藤四郎は怯えたように身を捩った。

太刀の指には明確な意図があるのは、私にも見て取れた。槍のようにただ肉筒で己の性器を擦り射精しようというのではない、相手の快楽を引き出そうとする動き。身体共々精神を陥落させる趣味でもあるのかもしれない。なんとも悪趣味なことだ。

太刀の持つ蛇骨の尾がくねりながら白濁の伝う薬研藤四郎の太股に絡みつき、まるで牢の外に居る私に見せつけるようにぐいと力尽くで片足を大きく開かせる。

「や……ッ」

強引に足下を崩されて、薬研藤四郎の上半身が傾ぐ。それを背後から羽交い締めにするように持ち上げた太刀は、堅く漲った肉棒を小

さな尻のさらに奥深くまで挿入し小刻みに腰を使い始めた。
「っ、いっ、や……やめ……っ」
膝立ちのまま大きく開脚させられた薬研藤四郎はいやいやと絹糸めいた黒髪を振り乱しながら身悶える。そこで、私は一つの変化に気がついた。いつもは力をなくして項垂れているだけの薬研藤四郎の幼い性器が、緩く勃ちあがっているのだ。先端からは透明な粘液が滴り、淡い肉色の幹を濡らしていた。太刀の逸物を飲み込んだ結合部からはちゅくちゅくと濡れた音が早い感覚で聞こえ、太刀も、薬研藤四郎も呼吸が速く、浅くなる。
「ふ、っ、はアッ、アッ…」
きつく食いしばった小粒な白い歯の隙間から、堪えきれない声が漏れ始めた。木格子に縋った両腕は力んで、時折何かを堪えるようにきつく握りしめられる。
太刀が小刻みな突き上げをやめ、今度は殊更ゆったりとした抽送を開始した。腰を密着させるように深く挿入した後、華奢な身体を檻に押しつけるようにして身体を揺すった。
奥を突かれる度、松明に照らされたなめらかな下腹が痙攣する。しっとりと汗を浮かべた白磁の肌は妙に艶めかしく、私もつい目を奪われた。何かを美しいと思う心などとうに失せたと思っていたが、何故か薬研藤四郎の痴態から目を離すことが出来ない。
いつしか薬研藤四郎の性器は震えながら腹に付くほど勃起し、だらだらと白く濁った精液を垂れ流し続けていた。手入れを何度も経ているとはいえ、どうやら肉の身体というものは学習をするものらしい。
薬研藤四郎は、太刀との交尾によって紛れもない快楽を感じているのだ。
「……いッ、……、だ、……や、あ、あアッ!!」
深い抽送に、必死に声を出すまいと食いしばっていた唇から、ついに悲鳴とも嬌声ともつかない大きな声が上がった。普段聞くような低い苦悶の声ではない、上擦ったような高い声。腹の奥を穿たれるたび、彼は彼らしからぬ高い声で、あ、あ、と啼いた。
再び腰の動きが早くなり、パン、パン、と肉がぶつかりあう音がする。好き勝手に揺さぶられる身体はまるで人形のようだ。けれど、乱れた黒髪の隙間から覗く表情は平時の人形のような血の気の薄い顔ではなく、目元や頬に朱を散らし、涙や涎などの体液で汚れた酷く崩れた表情だった。
「あ、あ、腹、やぶけ……うッ、奥だめッ、も、や……あッ」
藤色の瞳は涙に濡れ、強制的に与えられる快楽にすっかり濁りきっている。
すると、一際深く薬研藤四郎を貫いた太刀が低く唸った。
「ッ！　あ、う……い、やだ、出て……ッ、――――！」
太刀の腕の中で、薬研藤四郎の身体がびくびく、と小刻みに痙攣する。直後、幼い性器から少量の精液が溢れて石の床に滴った。
拓いた肉壁の奥へ精をまぶすように腰を揺らしていた太刀の喉から、嗄れるような耳障りな声が上がる。
我らは言葉を持たない。持たないが、同属である私には、太刀が発した声の意味が分かっていた。
――嗤っているのだ、憐れな短刀を。
太刀が立ち去った後、木格子に背を預けたまま動かない薬研藤四郎を見て、また今日も手入れが必要であろうと私は牢へ近づいた。
そこで、ふと気付く。
最早服とも呼べないぼろぼろの布を纏った薬研藤四郎は、きつく己の肩を抱いて震えていた。槍よりは手酷く扱われている印象を受けなかったが、どこかに深手でも負ったのだろうか、と近づいてみると、薬研藤四郎は瞳からひとかけらの光を零した。
松明の光を受けてぴいどろのようにきらきらと光るそれは、次から次へと彼の頬を転がり落ちて床に散らばる。
「……ッ、……ふ、……うっ」
薬研藤四郎は、泣いていた。
今までどんな仕打ちを受けようと泣いたことなど無かった彼が、大きく胸を喘がせしゃくり上げながら、大粒の涙を零しながら嗚咽して

いる。
「畜生、……つちく、しよお……！」
ガン、と大きな音を立てて木格子に黒い手袋に覆われた拳が叩きつけられる。当然彼の力ではびくともしないから、きっと手の方が痛んでしまっただろう。
彼は泣きながら、破られて床にうち捨てられていたシャツで体内に放たれた精を拭った。そんなにしたら柔い肌のほうが傷ついてしまうだろうという勢いで、次々体内から滲んでくる白濁をごしごしと拭い続ける。
そこで私はようやく思い当たった。
彼は蹂躙された事実よりも、己の身体が快楽に屈したことが屈辱的だったのだ、と。
ただの量産品として生まれ、歴史の中で名を残す事も無く消えていった私には分からない事だが、きっと今日の行為は誇り高い生まれである彼の矜持に深く傷をつけたのだろう。
彼は涙をいっぱいに溜めた瞳で牢の入口に立つ私を睨み付けた。薄い眉を寄せ、唇をきつく引き結んだ表情は、幼子が大声で泣き出す寸前といった様相だ。
ちくり、と再び無いはずの器官が痛んだ気がした。
とにかく手当をしてやらねばならない、と薬研藤四郎に手を伸ばすが、毛を逆立てる猫の子のように歯をむき出して威嚇される。
「俺に、…ッ触るな！」
嗚咽混じりの声はいつものような凛とした低い響きはなく、まさに癇癪を起こした子供のようだ。
かといって、痛めつけられた身体を放置するわけにもいかない。私は身を捩って逃げようとする薬研藤四郎を捕まえ、肩の上に担ぎ上げた。
「……っ、ろして、やる、……ッ絶対に、お前たちを殺してやるからな……！」
ばらばらと熱い雫が背に落ちてくるのを感じながら、私は手入れ部屋へ向かって歩き出した。
あれ以来、薬研藤四郎は目に見えて憔悴していた。
刀剣男士には食事が必要であるというのに、出されたものにほとんど手を付けないし、無理矢理口に詰め込んでも抵抗する様子もなくされるがまま垂れ流す。
昨晩も、再び牢に訪れたかの太刀に執拗に犯され、私が手入れ部屋へ担ぎ込んだ。
手入れで身体の傷は治せても、精神までは修復できない。
少し前までは、この牢に捕らえられた刀剣男士たちは入れ替わりが激しかった。しかし、最近は時の政府も逆行軍も時空移動の痕跡の隠蔽の術を学んできたのか、我ら検非違使陣営に気配を察知される事がぐっと少なくなり、牢の中に捕らえられた刀剣男士たちが駆り出される場が減っている。
ゆえに薬研藤四郎の悪夢は今も終わらないまま、夜毎繰り返されているのだ。
強い光を瞳に宿していた彼の精神も、最早限界に近いのかもしれない。もともと痩せていた彼のさらに痩せてしまった横顔を木格子ごしに見つめながら、私はそんな事を考えた。
その日の晩。
いつものように私は地下牢の見張りの任につくべく、長い階段を下っていた。また今夜も彼の快楽と苦悶の声を聞くのだろうかと思えば、少しだけ憂鬱になる。
松明の橙の光に照らされた地下道へ降りて、いつものように『薬研藤四郎』と札が貼られた牢屋を覗き込む。
すると、木格子にくくりつけられた白い布が見えた。そしてそのすぐ下には、艶やかな黒髪に覆われた丸く小さな頭が見える。
サッと血の気が下がった気がした。
――首を、吊っている。

薬研藤四郎は白い肌着を首に巻き付け、木格子に背を預けるようにぶら下がっていた。

見張りの前任者と交代からそう時間は経っていない。私は急いで牢屋に飛び込むと佩刀を抜き放ち、彼の身体を床から釣り上げている布を一閃した。

びぃ、と音を立てて布が裂け、支えを失った薬研藤四郎の身体は制御を失った凧のように傾いで、とた、と音を立てて床に転がる。

慌てて抱き起こせば、薬研藤四郎はゴホゴホと勢いよく咳き込んだ。良かった、まだ死んでいなかった……とホッとしたのも束の間、紺の上着だけ羽織った身体が勢いよく起き上がった。

私が驚いて身を引くと、一体どこにそんな力が残っていたのだというほど素早い動きで薬研藤四郎は私の脇に置かれた打刀を奪おうと手を伸ばしてきた。咄嗟にその手を打ち払い、細身の着物の中でなお遊んでいる腕を掴み上げる。

「くっ……！」

腕の自由を奪われた彼はじたばたと足をばたつかせるが、当たってもさしたる被害はないほどに弱々しい蹴りはいっそ憐憫の情を感じさせる。

彼の本体である短刀は牢に閉じ込める前に当然取り上げてあるのだが、まさか服を使って自害を試みようとするとは——刀の付喪神が首つり自殺を考えようなどとは思ってもおらず、心底驚いた。

刀剣男士とはそんなにも人間に近い感覚を持っているのか、と。

ひとしきり暴れた後、力で敵わないと諦めたのか、薬研藤四郎は私の腕の中で息を乱しながら項垂れた。そして、

「……折って、くれ」

辛うじて聞き取れるほどの掠れた小さな声に、私は目を瞠った。

「あんたも刀なら分かるだろ⁉こんなところで慰み者として生きていくのは耐えられない。俺は刀なんだ、俺の身体は戦うためにあるんだ……！」

飴玉のような丸い大きな瞳に、みるみる水の膜が張っていく。堪えるように何度か瞬くけれど、溜まった水は結局形を崩して溢れ出し、黒い疎を濡らした。

彼の零した熱い雫が、燃え尽くした灰のように乾き、熱を失った私の心に一滴、また一滴と染みこんでいく。

こんな瘴気に塗れた汚泥の中で、溢れる涙も拭わずに、刀でありたいと、そのためならば命を捨てると見上げてくるその瞳の、その姿の——なんと美しいことか。

とめどなく溢れる涙を拭ってやりたいと思うけれど、私の醜い異形の手で触れてはきっとこの美しい刀を傷つけてしまうだろう。

私が呆然と彼にみとれていれば、階段の上からがしゃり、がしゃり、と甲冑を揺らす音が聞こえた。

あの太刀がやってきたのだ。きっと今日もこの美しい刀に快楽を教え込み、矜持を穢すつもりなのだろう。

近づいてくる足音に腕の中で薬研藤四郎の澄んだ瞳がみるみる濁り、怯えたものへと変わっていく。

捕まえた細い手首が、小さく震えた。

——気がつけば、私は牢の呪符を破り、薬研藤四郎を抱えて本丸を飛び出していた。

驚くほど軽い彼の身体を担いだまま、夜の森を駆ける。遠く、燃えさかる炎を反射した空が紅く染まっていた。

この時代、そしてこの場所は、よく刀剣男士が現れると報告されているところだ。

人の手の入っていない道なき道を、鞘に収めたままの刀を振るい草薮を打ち払いながら進む。いざ意識をして触れてみれば、抱え上げた薬研藤四郎の肌は背の低い木に引っかけただけでも破けてしまいそうなほどに柔らかかったからだ。

私の肩に担がれた彼はしばらくの間何事か喚いていたが、私が地下牢を抜け出し外に出た途端に急に大人しくなった。それ以来、ずっと肩の上でこちらの様子を訝しげに伺いながら沈黙を守っている。どこか戸惑った空気を感じるが、それはそうだろう。

私も、私自身の行動にひどく戸惑っていた。

獣道をしばらく進むと、森が少しだけ開けた場所に出た。人が通った跡もある。

ここであれば、いずれ通りかかった刀剣男士が彼を見つけることだろう。

私は薬研藤四郎を地面にそっと下ろした。そして、本丸から持ち出してきた彼の本体を彼の前に突き出す。

私の醜い手の中で、黒い漆塗りの鞘と白鮫皮の柄巻で飾られた美しい短刀が、己を振るう者を待っていた。

「あんた、何で……」

黒い皮手袋に覆われた小さな手で短刀を受け取った彼が、困惑した様子でこちらを見上げてくる。

何故、と聞かれても私にも分からない。私はゆるく首を振った。

唯一つ分かっていることは、これは重大な裏切り行為であるという事だ。それは私の痴れた頭でも重々理解している。

そして、私が彼を連れ出したことはきっとあの太刀によってもうばれているだろう。本丸に戻ったとして、ただで済むはずがない。

それでも私は——この美しい刀が、刀としての矜持を踏みにじられるのを見続けることが耐えられなかったのだ。

私は、この感情を彼に伝える言葉を持ち合わせていない。この感情を何と呼べばいいのかも分からず、伝える声すらも耳障りな雑音にしかならない。口を開いても、喉からはしゃがれた獣のような唸りが漏れるだけなのだ。

呆然といった様子でこちらを見上げてくる瞳に、丸い月が映っている。色を取り戻した薄い藤色の瞳は、まるで暗闇の中の猫のように光っている。

牢では見る事が出来なかった美しい姿にしばし魅入っていれば、ふいにその瞳が驚愕に見開かれた。一拍とおかずに、背筋が凍るような殺気が肉迫する。

「ハアッ！」

怒気漲る気声を上げて、一閃が闇を切り裂く。咄嗟に薬研藤四郎を突き飛ばし己も身を躱すが、笠の一部がバッサリともっていかれた。体勢を立て直し振り返ると、森の陰から現れたのは葡萄色の上衣を纏った打刀だった。薬研藤四郎と似た色をした瞳がぎらぎらと気炎に燃えこちらを見据えている。

人間ではない。刀剣男士だ。それもかなり、練度の高い。

私も佩刀を抜き去り身構えた。背後に庇った薬研藤四郎が当惑し私の事を見上げている気配がするが、最早私にそれを構っている余裕はない。

「貴様、検非違使だな、他の仲間はどこだ」

「そんな事、素直に答える訳がないでしょう」

呆れたような声と共に、ふわり、と甘い花のような香りが漂う。視界の隅に、夜だというのに蝶が舞う姿が見えた——気がした。

ヒュウ、と風を切る音と共に振り下ろされた刀を、すんでのところで受け止めた。ガキッと耳障りな音を立てて刀がぶつかり合う。太刀筋を追うように薄紅の衣が翻り、間近にある左右色違いの瞳が蔑んだ色を湛えて私を捕らえた。

「彼らは言葉を持たない。どんな拷問をしたって本丸の場所を吐かなかったじゃないですか」

だからただ、現れた順番に殺せばいいんですよ。と艶やかに弧を描く唇を舌先で湿らせ、薄紅の刀は嗤う。

上背はあるが、腕も身体も私より一回り以上細いにも関わらず、噛み合った刃は少しでも退けば深々と我が身を貫くであろう重さがあった。勢いをつけて噛み合う刃を打ち払い、後方に下がる。が、その背後から白い影が踊り出た。

「後ろだぜ！」

宵闇の中でも光を放たんばかりの白い羽織を翻し、もう一振現れた刀剣男士が刀を振るった。先に現れた二振より、間合いが広い。

しまった、太刀か！　と思った時には、右上腕に鋭い熱が走っていた。傷口から血のように、どっと黒い瘴気が溢れ出す。

私は痛みに呻いてたたらを踏んだ。三振に囲まれ、残す退路は先ほど通ってきた獣道だけだ。

囲まれた三振に視界を順繰り巡らせる中で、遅れて現れた黒衣の太刀が薬研藤四郎を引き寄せるのが見える。

「もう大丈夫だからね」

その言葉に私も心の中で頷いた。そうだ、もう大丈夫なのだ。お前はそこで刀として生きていけ。

私は、黒衣の太刀の腕の中から戸惑った様子でこちらを見ている薬研藤四郎に向け、小さく頷いた。

私はじりじりと後退し、背後にある獣道へと近づく。陣営に戻ってどうするのだと思わなくもないが、敵に捕縛され拷問されるのは御免だった。一瞬でも躊躇えば、即座に切り伏せられるだろう。草を踏む軸足に、じわりと力をかける。

次の瞬間、恐ろしい程の殺気が銃弾よりも痛烈に私の身体を貫いた。その殺気の出所を目で探るより前に、目の前に立ち塞がる三振の上方、茂る樹林の上から黒い影が宙に身を躍らせる。

黒い影に、月が陰った。

鏑矢のように空を切る音を立てて、黒い影がこちらに向けて飛び込んでくる。受け身を取るより先に、しなやかな足が力強く首に巻き付いた。

飛び込まれた勢いで諸にどうと倒れ込んだ私の上に乗り上げた影に、息が止まる。

夜に溶ける艶やかな黒髪と、空に浮かぶ月よりなお光を放つ白い肌。澄んだ藤色の眼光が宵闇に煌めいていた。

振り上げた白銀の刃が、月の光を受けて氷のような冷たさで冴え冴えしく輝く。

迸る殺気に、その美しさに、瞬きも忘れて私は魅入った。

ああ、戦場でのお前は、刀としてのお前は、こんなにも美しいのか――

――薬研藤四郎。

白銀の短刀が、闇を貫く。

「柄まで通ったぞ！」

凛と通る勝ち関の声が、夜の森に木霊した。

■終■

山賊×薬研

TOULOVE fanbook
Mitsu
Kani / Joaco

検非違使×薬研